

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

二〇一二年秋季企画展 「癩院記録」北條民雄が書いた 絶対隔離下の療養所

今年度の秋季企画展は、「癩院記録——北條民雄が書いた絶対隔離下の療養所——」と題して10月6日(土)より12月27日(木)まで開催する。この展覧会は、作家北條民雄の随筆「癩院記録」と「続癩院記録」を展示化したものである。全生病院に入院していた北條が記録した、絶対隔離の時代の療養所内に関するルポルタージュを、当時の道具や写真を用い展示として表現し直すことをめざした。

まず最初に述べておかなければならぬことは、本展で描く療養所の様子は、プロミンにはじまる化学療法の登場よりも前の時代のものだということである。化学療法によって、ここに描いた様子、特に患者に見られる症状は存在しなくなった。したがって現在もこれほど重症の患者が療養所にいるということはないし、今後これほど重症化する患者もいない。もちろんすでに治っている回復者に到っては、言うまでもない。

では、もはや過去のものとなった状況を、改めて展示で取り上げる意味はどこにあるのか。それは、本展の土台をなす北條の随筆が、当時の症状と患者を取り巻く状況とを背景にして、重度の身体障害

を負う者や、治療が望めない病気を患う者が身をもつて示す「それでも人間として生きることの尊さ」を描いているからだ。これは原因や時代背景が異なっていたとしても、まぎれもなく広く社会にわたっての今日的課題である。

今回展示ストーリーとして用いた二つの随筆は、文学界の注目を集めた北條が、自分の暮らす全生病院がどのような場所なのかを社会に知らせる目的で、1936(昭和



重病室(6病室) 昭和17年

和11)年雑誌『改造』に連載したものだ。元々療養所の外の人たちが理解できるよう配慮して書かれているため、それから70年以上の歳月を経た今日の私たちが読んでも、当時の療養所の様子を想像しやすいものになっている。発表前に幾分か療養所側の検閲を経ている可能性が高いとは言え、基本的にノンフィクションの作品である。

これらの随筆を展示しようと考えたのは、異なる表現方法で描き両者を併せることで、文章表現だけでは持ち得なかったより強いリアリティをもつて当時存在した状況を認識し、患者が示した「生きることの尊さ」に共感できるのではないかと思ったからだ。文章表現と展示表現は、それぞれ異なる長所と短所を持っている。例えば文章表現は人間の感情や概念を示すことに優れているが、展示表現はこの点は不得手だ。逆に展示表現は直接的なリアリティの提示に優れているが、文章表現はすべてを一旦文字に置き換えるプロセスから免れ得ない。ひとつの状況を複数の方法で描く表現が積み重ねられていけば、それだけその状況に対する認識に、厚みを生むことができるのではないだろうか。

したがって今回の企画展は、北條の作品世界を展

示する、いわゆる「北條民雄展」ではない。北條の随筆をあくまで「素材」に、そこに書かれている状況をできるだけ忠実に再現することで、絶対隔離の時代の療養所と、人間として生きる患者の姿を描くための展示である。

苛酷な絶対隔離の時代にあつても、患者は療養所の中で日々の生活を持ち、少しでも「良く」暮らそうと努めて来た。患者が人間として生きた姿を見失わないという認識を、患者・回復者ではない私たちが獲得することは、回復者の人生が持つ豊かさの部分をも否定してしまいかねない歴史認識を乗り越え、一人一人の回復者それぞれと向き合った人間関係を築く上で不可欠なはずである。また、ハンセン病の歴史と今日の課題との接点を、私たちが自分自身で見つけることへとつながるだろう。少しでも厚みのある認識を手に入れるための試みとして、今回の展示については展示を見るだけでなく、また随筆を読むだけでなく、展示と随筆の両方をぜひ相互補完的に活用してもらえことを願っている。

なお、会期中に付帯事業として、『吹雪と細雨 北條民雄・いのちの旅』の著者である清原工氏を講師にお招きし、講演会を開催する。詳細は次の通り。

開催日時・11月10日(土) 午後1時30分～3時(午後1時開場)、会場・当館映像ホール、定員・150人(予約不要・先着順)

北高作陶展会場



天理市のギャラリーおやさとで 北高作陶展を開催

9月23日から26日までの日程で北高作陶展が奈良県天理市のギャラリーおやさとにおいて開催された。本展は、当館の社会啓発事業の一つとして開催され、関東周辺以外の方にも当館やハンセン病回復者について広く知って頂くという企画したものである。

奥の会場では、北高さんの作陶の様子を映し出したビデオを北さんのインタビュートともに上映し、北さんの作陶への思いも来場者に強く伝わったようであった。また、パネル展示として、ハンセン病についての解説や歴史と共に、天理教とハンセン病の関係史についても年表で示し、天理教信者の方も興味深く観覧していた。全国の療養所の中には、外島保健院（現邑久光明園）や大島青松園、長島愛生園、栗生薬泉園など戦前から天理教の教会がある療養所もあり、その関係は古くから続く。その後、1965（昭和40）年に天理教内にハンセン病回復者である信者とともに、支援や啓発活動を行う天理療養所布教協議会ができた。さらに療養所入所者が天理に戻った時に宿泊できる「別所母屋」もその翌年に開設された。

そうした入所者のお世話をするのは、天理大学宗教学科「成人会」の学生たちである。現在も療養所訪問を行い、親交を深めている。会場には、北さんと学生たちが笑顔で写る写真も合わせて展示しており、回復者と若い学生たちとの心のつながりが表れているとの感想を述べる来場者もいた。9月25日には天理大学ふるさと会館にて、北高さんと当館図書室長兼国立感染症研究所ハンセン病研究セ

ンター客員研究員の儀同政一先生による講演会を開催し、多くの方にお越しいただいた。本展は4日間の開催ではあった

中国四川省瀨予防協会が 全生園と資料館を視察

6月26日、中国四川省瀨予防協会の理事6名が資料館に来館した。一行は、午前中に資料館の展示を見学し、昼食後、朝戸園長、宇野先生のご厚意により、希望されていた多磨全生園の施設を見学し、その後、再び資料館研修室にて、語り部の平沢・佐川両氏を交えて、意見交換を行った。

が、普段なかなか来館できない方々のご来場も多数あったので、今後も当館啓発活動の一つとしてこうした機会を設けたい。

が、印象に残った。予防協会の方々は資料館を見学した感想を、ハンセン病問題を専門に取り上げる博物館が、ハンセン病回復者の努力によって立ち上がり、国がその運営資金を保障している現状に驚かされた。「ハンセン病に対する差別・偏見をなくするための啓発拠点としての博物館施設を持つ意義について目を開かされた。」と述べられた。別際には握手をしながら、「是非、四川省にも来て、ハンセン病医療の実態を見てください。きつと日本の資料館活動にもお役にたてることがあるはずです。」と述べられた。研究交流の第一歩として有意義な一日であった。

国立ハンセン病療養所が所在する自治体（11市1町）は、40年前から「全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会」（会長・東村山市の渡部尚市長）を作り、毎年持ち回りで総会を開催し、国への要請活動を継続して来ました。

2 医師・看護師等の不足の解消及び雇用職員の確保・維持・拡充
3 入所者及び自治会の意向を尊重した療養所の将来構想策定と速やかな実現
4 地域の特性や実情に則した療養所の地域解放への実現

9 入所者に対する偏見・差別の解消及び名誉回復のための人権啓発
10 ハンセン病問題の歴史に関する正しい知識の普及
11 ハンセン病を正しく理解するための学校教育及び教育事業の推進

所在市町連絡協議会で 職員体制の充実等を決議

今年7月12日（木）鹿児島県鹿屋市で総会を開き「ハンセン病問題基本法」や、「国立ハンセン病療養所の療養体制の充実に関する決議」（衆・参両院で採択）を尊重して、次のことを決議しております。（前文略）

5 療養所の土地利用に係る賃借料の免除又は減額
6 慰霊施設、緑地空間等の保全
7 歴史的建造物及び歴史的資料等の保存・活用
8 展示施設を活用した継続的な学芸事業の実施

12 その他、ハンセン病問題に、諸施策の速やかな実現
平成24年7月
全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会

1 入所者の生活環境の整備及び医療・看護・介護棟職員体制の充実

1 入所者の生活環境の整備及び医療・看護・介護棟職員体制の充実

なお、同協議会は災害時にネットワークを活かし、迅速に支援しあえる態勢をつくるため「災害時の相互支援に関する合意書」を締結しました。

山内さん夫妻の写真展 「生きるって、楽しくて」

9月8日(土)より同30日(日)まで、当館ギャラリーにおいて写真展「生きるって、楽しくて」

写真展「生きるって、楽しくて」は、山内定さんと山内きみ江さんの写真展。山内定さんは、多磨全生園で結婚した。定さんは、昨年84歳で逝去されたが、きみ江さんはその後も「自分がおかれた境遇に負けず、いろいろなことに挑戦する」という生き方を失わず、社会復帰を遂げ、今年7月の「花さき保育園」開園式に参加するなど、積極的に自身の存在を表現してきた。

写真は片野田齊さん(報道写真家)によるもの。同氏は夫妻と2年半交流し、定さんの逝去を挟んで写真を撮り続けてきた。

初日の8日午後には山内さんと片野田さんによるオープニングトークが、22日(土)午後には山内きみ江さんの講演会が当館映像ホールで開催され、双方とも盛況であった。

山内さんは今年初めに「支えられての半生」(私家版)という本を著している。写真展では最近2年半の夫妻の様子が展示されているが、それまでにどのような歩みがあつたのか、この本を手にとることにより深くみてくるだろう。



昨年は東日本大震災の影響で中止されましたが、今年は8月20日(月)より24日(金)まで、全生園研修棟、ハンセン病研究センター、国立ハンセン病資料館などを会場に、第34回ハンセン病医学夏期大学講座が開催されました。受講生は男17人、女20人、計37人で、内訳は久留米、大阪、名古屋、岡山、金沢、横浜、東京など

第34回夏期大学講座 大学、医療関係者37人が参加

10の大学から20名、療養所関係者は、東北、多磨、邑久、大島、星塚、奄美など6施設から、医師、看護師など7人、その他厚労省、交流会がもたれ、午後5時30分からは講師(41人)を交えた関係者全員による懇親会が、全生園本館2階第2会議室で開かれました。

2日目からは国立ハンセン病資料館の見学などや、『総合』、『医療福祉』、『国際』の3部門に分かれ、それぞれ関係講師の講義を受け、ハンセン病問題への理解を深めました。

お彼岸の墓参り 職員の介助で大賑わう

当館のすぐ隣には、多磨全生園の納骨堂がある。普段は人通りもあまりないが、9月のある日、入所者の皆さんが次々に納骨堂へ集まってきた。お彼岸に行われる、墓参りの日だったのだ。お線香をあげて物故者に手を合わせ、振る舞われた甘酒を呑み、知り合いと言葉を交わす。行き会った人同士の「久しぶり」「元気だったか?」という会話や、「道にこんなに入所者が出てくるのは久しぶりだなあ」という感慨深げな独り言が聞かれた。同じ園内でもセンターにいないこと、めつたに顔を合わせる機会がないこと、外出するほど元気のあふれる人が少なくなったことを感じさせる。療養所の現状を見た気がした。



納骨堂お参りの人々



平沢さんと話そう 〈行事予定〉

ハンセン病資料館では、資料館映像ホールにおいて、団体見学者向けのハンセン病の歴史を概説した「ガイダンスビデオ」をご覧いただき、語り部の平沢保治さんと「命と心の対話」を行うイベントを月1回のペースで行っています。お誘い合わせのうえ、ご来館ください。

【2012年の開催日】

10月28日(日)
11月18日(日)
12月16日(日)

【時間と内容】

●ビデオ「柁の向こう側」放映
午後2時から2時40分

日本のハンセン病の歴史、現在の療養所の様子などをわかりやすくまとめたビデオです。中学生以上一般向けですが、なたでもご覧になれます。

●平沢保治さんとのお話し会

午後2時40分から4時

当館語り部の平沢保治さんが、命の大切さ、人と人が心と心を通い合わせることの大切さをお話します。

平沢さんと、直接お話をしてみませんか?
平沢さんは、質問を大歓迎しています。

子どもから大人まで、ハンセン病を通して、平沢さんといっしょに命の大切さを学んでみませんか?

—実物資料調査—

今年是多磨全生園で実施

全国の療養所を対象にした実物資料調査は3年目となる。今年是多磨全生園で調査を実施している。

8月から田代芸員が入所者のお部屋を訪問し、「資料を探しています」「パンフレットを渡して説明を行っています。お部屋を訪問すると「引越して捨ててしまった」「もう少し早くに来てくれれば」というのが多くの方の反応である。しかし熱心に説明を聞いてくださり、資料を探してくださる方が多い。これまでに様々な資料を確認している。写真、カラオケ大会のDVDや衣装、社会復帰中に会社から受けた賞状、自作の木工作品、食

缶、リハビリで作ったのれん、自作のセーター、工夫されたテニスラケット、囲碁の段位免状、二重湯呑み、医療品、短歌の直筆ノート、看取った入所者の遺書、家族の遺品である腕時計、などである。物置きを見せて下さった方も多く、ミシン、緑化作業で使っていた道具、チェサの道具、大工道具、盆栽道具、文化祭で展示した写真のパネル、などが確認できた。これらの確認された資料は持ち主と相談して収集したり、写真に撮影し記録に残させてもらっている。

今回の調査では職員の方からもご協力を頂いている。職員のお声かけによって、入所者の遺品を収集することができた。理由があり使われなかった死装束は手縫いで作られたものであり、盲目になっても針を持ち裁縫をされた故人を偲ばせる大切な資料であった。



園児からの花束贈呈

節目を祝う全生園敬老会

10月は入所者・職員へのパンフレット配布を継続し、自治会からの依頼を受けたハンセン病図書館内の実物資料の調査も行う。同所

に収蔵されている資料について、ハンセン病図書館の担当であられた山下道輔氏にうかがいながら、実測・撮影・リスト作成を行う。

9月12日多磨全生園コミュニティセンターにおいて敬老会が開



催された。多磨全生園の入所者数は245名、平均年齢は83歳。今年喜寿・米寿を迎えた方はそれぞれ14名であった。人生の節目を迎える方々を祝うために多くの入所者と職員が集まった。

第1部の式典では米寿の方々に朝戸裕園長と浅野看護部長から赤いチャンピオンコが贈られ、佐川修自治会長からは一人一人にレイがかけられた。次におおば保育園の4名の園児から手作りの花束が一人一人に手渡された。喜寿の方には渡部尚東村山市長から記念品が贈呈された。

第2部のアトラクションでは花さき保育園・ぞう組(5歳児23名)による歌の披露があり、会場はなごやかな雰囲気包まれた。保育園児が帰る際には、入所者とふれあう場面が見られた。

韓国より資料館視察に

8月28日、韓国から当館視察のために麗水愛養園事務局長、政府関係者、大学教員など4人の方が来館された。麗水愛養園は、1909年にアメリカ人宣教師ウィルソンによって設立された光州癩病院後進の私立療養所として1936年に誕生した。

現在は、ハンセン病回復者の定着村が併設しており、広大な敷地内には病院や教会が点在している。愛養園の資料館には以前から膨大な写真や医学資料などを展示、保

管するために資料館が設置されていたが、この度、政府から予算がつき、拡充することになったという。4人は当館の常設展示室や映像ホールを見学し、運営方法についても熱心に質問されていた。

当館としても今後、韓国のハンセン病関係資料の保存状況と資料館活動内容について教えていただき、相互交流をしていきたい旨を伝えた。愛養園資料館拡充を通して、充実したものになることを願っていた。

大阪で「全療協60年のあゆみ」展

大阪人権博物館において当館巡回展「たたかいつづけたから、今がある―全療協60年のあゆみ―」がある。全療協博物館、大阪府総合福祉協会、ハンセン病回復者支援センターの主催で開催された。同展は7月24日から8月26日までの期間で開催され、この間に回復者による講演会や、ドキュメンタリー映画の上映会も開催された。

展覧会場では、巡回展の写真とともに大阪のハンセン病史に関わ

る資料も多数展示されており、来館者は興味深く観覧していた。

本展は、全療協が厚生労働省に提案し、任意で都道府県におけるハンセン病啓発事業として進められることとなった。

今年は、大阪府の他、これまで愛知県でも開催され、今後は福岡県、北海道でも予定されている。普段、東京まで足を運ぶことのできない方にもこの機会にご覧いただきたい。